

● 4月選評

小島なお

あたたかい言葉をたべる

わたしは、人を産んだことがある

...

青野 椰栄

あたたかい言葉を肉まんのように大事に慎重に食べる。お腹のなかをくだってゆく言葉の温みが、身体の奥底に眠る胎の感覚や記憶にやさしく触れる。

指かるく吸うとわたしは

躑躅より海に似ている

裸足で来なさい

...

汐見りら

子どもの頃の懐かしい遊びに指先を吸ってみる。すると、蜜の味というよりも淡い塩っぱい味がした。私を知るために靴を脱いで足を濡らしてほしい。

くつついた磁石に生を感じてた

自分が男だったからだな

...

詩央えみる

たとえばS極とN極が引き合う力。かつて自らの男性的な感受性はその力と呼応していた。いまはそうした自身をすこし遠巻きに懐かしく眺めながら。

花陰にカレーは飯をまわりこむ

...

ムクロジ

食べ進めてご飯の山が崩れると、ダムの水のようにせき止められたカレーがゆるやかにまわりこむ。花の季節の鮮やかな陰翳が今をたしかに縁取ってゆく。

珈琲の湯気見上げれば剥き出しの
梁私のも見せてあげたい

帆立

煎れたての珈琲から立ちのぼる湯気の先。木造だろうか。喫茶店の天上に渡る梁
が見える。私もまた他者に内側を無防備にさらけ出すことができたなら。

モンシロチョウの寂しさが

煙草の煙のように散った夜は

世界中、喫煙の日

...

森田 翠

春の空間に漂っていたモンシロチョウもモンシロチョウの寂しさもいずれ消え
てしまう。もう無いものを無かったことにしてはいけないから今夜は喫煙を。

ひとびと、と口にするとき

燃え上がる星よ

わたしは冬の機関車

...

霧島あきら

主語が大きくなるときに燃えあがる群衆感情にも似た星々。「ひとびと」から取
りこぼされる存在に黒煙を上げながら、冷たく疾駆する機関車がある。

尖塔に

鳶

巻きのぼる

どこにでも行ける女の子や男の子

...

牧角うら

柔らかい心身でいっしんに上へ上へと巻きのぼる鳶。無邪気に絡み合いながら、
いずれ尖塔を覆い尽くして、やがて塔を越えていこうとする営みについて。

月も見えているし

あなたの話を信じるね

電源にやわらかく触った

：

芒川良

月が出ている夜は、あなたの心が隈なく照らし出されるようで信じたくなる。電
源を切ればこの部屋の灯りは消えてしまうけれど、月の灯りは点いたままだ。

百年後合唱曲になる小指

：

小川 未夜子

このさき百年の私は、私の身体は、どんなドラマチックな出来事に吞まれ翻弄さ
れることになるのか。死後、私の小指は青少年たちに歌い継がれる伝説になる。